ライオンとネズミ?

まあと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ライオンとネズミ？

【Ｎコード】
Ｎ２６４８Ｍ

【作者名】
まあと

【あらすじ】
イソップ童話は、全く持って関係ありません。
何となく付けたタイトルです…。
かるくＢＬを意識してみました。

↓1

『ここ、試験に出るから丸、付けとけよー。』

目下、受け持ち教科、数学の授業中。

もう暦は１０月末。

教室の壁一枚外は、冷たい秋風が散った木の葉を巻き上げ、時々、校舎にも吹くのであろう。

ぶつかる音が静かな教室の中、生徒達の鉛筆の音に混じり聞こえる。

今日は少し肌寒いが晴れていて清々しい。

こんな、暗いコンクリートの建物を飛び出して、どこかに行きたい気分にもなる。

と、言っても、もう本日、最後の授業。

３時を回っているので、遠出は無理かな。

…なんて、大切な受験を控えている可愛い中学三年生の教え子達には、天気が良かろうが悪かろうが其れ所では無いだろうが。

この時期の受験生は、勉強の追い込みで少し可哀相だ。と、思う。

↓1（後書き）

私、多分、頭が悪い可愛い子が好きなんだと、思います。
…萌ポイントね。

↓2

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン。
授業の終わりを告げる鐘の音。

『はい。今日は此処まで。』

パタンと音を立てて、教科書を閉じる。

さぁ、可愛い子達よ、重苦しい空気からの開放だ。
まだまだ、戦いは終わらないが今日の所は、辛い諸行はひとまず終わりにしよう。

徐々に、生徒達の声で華やぐ教室。

教師の俺も、何となく気分が上向きになる。

授業中の物とは全然違う空気。
ピリピリした真剣さも必要だが、息抜きできる空間もクラスには必要だ。

「音頭先生、問2が分からないんですが。」

黒板を消していた俺に、教科書を片手に生徒の一人が質問をして来た。

授業以外にも、勉強しなくちゃならない。

受験生の悲しさ。
一服している暇も無いようだ。

『どこだ？篠原？』
「問２です。」
教科書を指差す。

『どれどれ？此処は、こうやって解くんだ。分かるか？』
「…分かりません。」

『…。』

分からないのが悔しいのか、口を尖らせる【篠原　獅子（れおん）】。

『ん～。篠原は、数学以外は優秀なのにな～。』

軽口のつもりだったのだが。

むむむっ。
篠原が、むくれたのが分かった。
科目に向き不向きがあるのだろう…。
頑張ってる受験生に一言多かった。

「分かるまで、やります。教えて下さい。」

『おう。』

やる気が有るのは、とても良い事だ。

最近、篠原は頑張っているのか、よく質問をしに来ている。
…が、少しこの調子だと理解に時間がかかりそうだ。

…と。
不意に思い出した。

『あ～。しまった、篠原。今日、先生、これから職員会議だったんだ。』

「え～。」

不服そうな篠原の声。

『悪いな～。』

「じゃあ、教室で待ってます。」

『明日じゃダメか？』

「ダメです。」

即答。

本当、根性あるな。

【篠原　獅子】は、確か、サッカー部だったはず。
クラス担任の俺は、生徒達が何の部に所属していたかも覚えている。

折れない根性は、サッカー部で養ったか…。

ここは熱意ある生徒に従おうか。
受験生には、一刻一秒を争う問題なのかもしれない。

「先生が来るまで、自習してます。」

『分かった。会議は1時間くらいで終わるだろうから、終わったら顔を出すよ。それまで、自分で考えてみなさい。』

「…はい。」

素直に自分の席に戻る、篠原。

クラスの生徒達の半分程は帰ったのだろう。
ポツポツと無人の机が目立ち始め、賑やかさも少なくなっていた。

職員会議は、授業が終わったら直ぐだ。
小うるさい先生方もいる。
よって、遅刻はマズい。

身支度を整え、俺は足早に自分の教室を後にした。

↓3

◆◆◆◆

毎度毎度の職員会議。
ここの所、2日に一度のペースで行っている。
何時もは、小一時間程で終わるのだが、今日のは長かった。
内容は…、と言うと、ある教科の全国テストの平均点が著しく低かったそうだ。
うちの学校だけ。
それについての、お小言と対策。
教室に顔を出すと言う、生徒との約束を思い出したのは、職員会議が終わって、暫くたった頃だった。

もう、6時を過ぎている。
…と、言う事は会議は2時間程あったのか…。
時計を見て思う。

『もう、居ないだろうな…。』

『1時間程』と言う、約束を破ったのだからしょうがない。

それでも、真面目な生徒だったら。
もしかしたら、律儀に待っているかもしれない。
教員室の窓からは、微かに部活動に励む下級生徒達の声が聞こえる。
まだ、生徒が残っていてもおかしくは無い時間帯。
『…、見に行くか。』
一応。
どっこいしょ、と自然に出てしまう自分の声に気が付かないフリをして、俺は、誰も居ないであろう教室に向かった。
残っているのは、大会を前にした運動部だけ。
受験を控えた三年生の校舎には、生徒達の姿は見えない。
校内は電気も点かず、日の届かない廊下や階段はもう既に、ほの暗い。
冬に向けて、日も短くなっているのだろうか。
何となく、寂しい気持ちにさせる。

【三年二組】

通い慣れた（当たり前か）担当クラスの教室のドアを開ける。

↓4

開けると同時に、教室の窓から、眩しいオレンジ色の太陽の光が飛び込んで来た。

…。

暫く、目が慣れるのを待って教室内を見回す。

前から2列目の真ん中の席。

明るい西日の中、まだ篠原は残っていた。

予想外。

もう、帰ってしまったと思っていたのに。

『篠原、先生、遅れて悪いな〜。』

ワザと明るい声で、席に近づく。

近づいてみれば、篠原は机に突っ伏して寝ているようだ。

道理で、責める言葉が無い訳だ。

何時もの篠原なら、どれだけやかましくまくし立てられる事やら。

『し〜の〜は〜ら〜、先生、来たぞ〜。起きろ〜。』

揺すってみるが、反応が無い。
勉強疲れか…。
夜、ちゃんと眠っているのか？
深夜まで勉強をして、授業中に居眠りをしてしまう生徒も多少なり、居る。
先生の身としては、ちゃんと休める時には休んで欲しいのだが。

『ふ～。』

起きない篠原に、溜め息をついて、隣の席に座る。

『し～の～は～ら～、れ～お～ん、く～ん。お～き～て～。』

このまま、起きなければ数学は基、学校に泊まる事にな～る～よ～。
隣からの攻撃にも、びくともしないか。
う～ん、手ごわい。

「…ん…。」

呼び掛けのかいあって、起きるか？

「んが…。」

…だめか…。

がっくし。

オレンジ色の夕日が、篠原の髪と頬を照らす。

↓5

教え子の小さい机に肘掛けをしつつ、起きない篠原を半ば少し諦めた視線で見ながら、思う。

こんなに、まじまじと一人の生徒の顔を観察した事は無いが。

【篠原獅子】は、綺麗な顔をしている。

と、思った。

サッカー部に所属していたせいでか、少し日に焼けた健康的な肌と、栗色のサラサラな髪の毛。

年齢のせいか、女の子にも見える。

が、制服は男子生徒用だ。

男の子なのに、長い睫毛。

其れに縁取られた、パッチリとした、やや吊りぎみの目。

猫目。

そんな印象。

【獅子】だ、もんな。篠原は。

それに比べて、俺。

【音頭実重（さねしげ）】

…普通だ。

否、三十路を過ぎた、おっさんに洒落た名前を期待するのも可笑しいか…。うん。

こんな俺にも、篠原のような時期が有ったのだろうか。
よく、名前の事で『ネズミちゃん』と、からかわれてはいたのは、思いだせるけど。

う〜ん…。

少なくとも、こんな整った可愛らしい顔はしてなかった。
残念ながら。

本当に、篠原の顔の作りは可愛らしい。
煩くない寝顔は特に。

子供特有のスベスベとして、柔らかそうな肌。
プラス、其れに綺麗なオレンジ色が注がれている。

自分が持ち得ない物に、急に、触れてみたいと言う衝動にかられた。

オレンジ色の唇に触れる。

…、よりにもよって、己の唇で。

予想通り、柔らかい。

皮膚が薄い分、その感触は特に感じられる。

口づけてから、余韻にでも浸ろうかと篠原の顔を見た、刹那。

ぱち。

機械にスイッチでも入れたかのような、目覚め方。

まだ、顔が近い。離れきってない距離。

当然、目が合う。

「ちゅうした…。」

小さい声だが、はっきり聞こえた。

完全に覚醒したのか、寝起きの声ではない。

↓6

「先生、れおんにキスした。」

俺に聞こえてないと思ったのか、もう一度、篠原が言った。

視線は、俺の目をしっかり見据えたまま。

『…し…してないよ。』

動揺して二、三歩、後ずさりしながら、掠れた声で答える。

いきなり、目覚めるとは思っていなかったので驚いた。

無意識に、口に手を当てて隠す。

教え子には、『嘘をつくな』と指導しているのに、自分はこの体たらく。

篠原の事実確認に、真っ赤な嘘で返す。

「…嘘。」

はい。嘘です。

ごめんなさい。

上目使いの篠原の、俺を見る目が厳しいものに変わる。

「先生。どうして、れおんにチュウしたの？」

それは、ネズミちゃんだからなんだちゅう。なんて。ばか。
…あぁ大分、余裕が戻って来た。
まだ、己の所業に少しどきどきしてるけど。

『篠原が、可愛いかったから…。』

今度は正直に、言えた。
大人として、言ってはダメだろうって事は、容易に予想が出来たけど。

「可愛いかったから？」

俺の答えに、キョトンとした目になる篠原。
オウム返ししないでくれ。

篠原が座っていた椅子から、立ち上がる。

「じゃあ、先生は僕の事が好きなの？」あ～。まぁ。
クラス担任だし。
嫌いな子は居ないよ？

「だから、キスしたの？」

…あ。

『チュウ』から『キス』に、なった。

篠原の目が、段々、潤んでくる。
そんなに、俺に『チュウ』されたのが嫌だったか。

『…うん。』

では、無く。
『はい』だろう？
とは、よく教師が言う言葉で。

大体、キスくらい、犬猫にでもするだろ？
ちょっと、触っただけだ。

そりゃあ、篠原にしてみれば、無防備な所に汚いおっさん菌でも移された感じ…かも、しれないが。

申し訳ない。

「じゃあ、」

篠原が続ける。

「先生。責任を取って下さい。」

は？責任？
『チュウ』の？

『責任？』

すっとんきょな声が出た。

「はい。」

金でもせびろうと言うのか。
言っとくが、金は無い。

『…責任って？』

一応、加害者。聞いてみる。

「…。」

下を向いて、考える篠原。

ノープラン…か？
ただ、俺を責めたかっただけなのか。

黙りこくる篠原に、本当に申し訳ない事をしたと思った。

↓7（前書き）

見返すと痛い…。

↓7

「…結婚。」

黙っていた篠原が、言いにくそうに口を開いた。

「…は、無理か。」

そうだね。

「僕、まだ15だから。」

そこか？

無理なのは。

「じゃあ、恋人だ。恋人になって、先生。」

再度、俺を見上げながら言う。

今度は、可愛らしく微笑みながら。

だがそれは、本末転倒では無いかね？

そこは、浅はかな中学生。

先生が恋人なら、テストの点数でも有利になるとでも思ったのか。

『篠原。先生、悪かったとは思っているけど…』

恋人にはなれない。

…と、口にしようとしたんだ。
良い年こいた大人として。
だけど、不意に抱きついてきた篠原に遮られる。
「ダメだって言うんなら、皆に、先生が僕にキスをしたって、言います。」
い…犬とか、猫にも、するのに。
『皆、って？』
「母にも言います。」
篠原母。
あ、あの、超人無敵のＰＴＡ会長か。
『…。』
バレたら、大変だ。
色んな意味で。
最悪な未来を想像して固まる。俺。
固まった唇に、柔らかいモノが触れる。

「恋人同士になったら、し放題ですよ？」

にこ。

胸元からのキスと、天使の微笑み。

いかん。堪えろ。
音図実重。
理性を総動員するんだ。
この子は、教え子。
中学生なんだ。

「ね？先生？」

『うん。』

だらしなく、丸め込まれてしまった。
俺の理性、全滅。

幼く、小さくても『獅子』は『獅子』。
小物な俺なんか、相手にもならない。

時計を見ると、7時を回っている。

冬が近づいている今日この頃、日が落ちるのも早く、外はもう真っ暗だ。

『篠原、もう遅いから送ってくよ。』

篠原の肩を両手で挟んで、俺から引き剥がす。

『先生、準備してくるから、篠原も帰り支度しなさい。』

「はい。先生。」

『数学は明日、教えてあげるから。』

あれ？
明日じゃダメなんだっけか…？
ま、いいか。

帰る準備に、教室を後にする。

『準備が終わったら、校門の所で待ってなさい。』
と、最後に伝えた。

↓8

◆◆◆◆

実重が教員室に戻り、誰も居なくなった教室で一人、【篠原獅子】は思う。

「今日は本当に、良い日だなぁ。」と。

「クスクス」と、実重との出来事を思い出し、笑う。

「まさか、狙ってた先生（獲物）から口元に来てくれるなんて。」

指を、己の唇に触れ、先程の感触を思い出す。

「食べてくれって言ってるようなもんじゃない。」

嬉しくて仕方のない様子。

「今は無理だけど…ゆくゆくは、先生には僕のお嫁さんになって貰おう。」

獲物を捉えた獅子が、楽しそうに笑う。

「決ーめたっと。」

そう言うと、獲物の待つ校門へと嬉しそうに駆けて行ったのでした。

↓8（後書き）

駄作ですが、また、懲りずに続くかもしれません。おろろ。
頑張って、『おいちゃん』を書いてみましたが…。
『おいちゃん』は難しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2648m/

ライオンとネズミ?

2010年10月20日08時54分発行